説話世界の熊野

弁慶の土壌

中瀬喜陽

日本エディタースクール出版部

説話世界の熊野

弁慶の土壌

中瀬喜陽

日本エディタースクール出版部

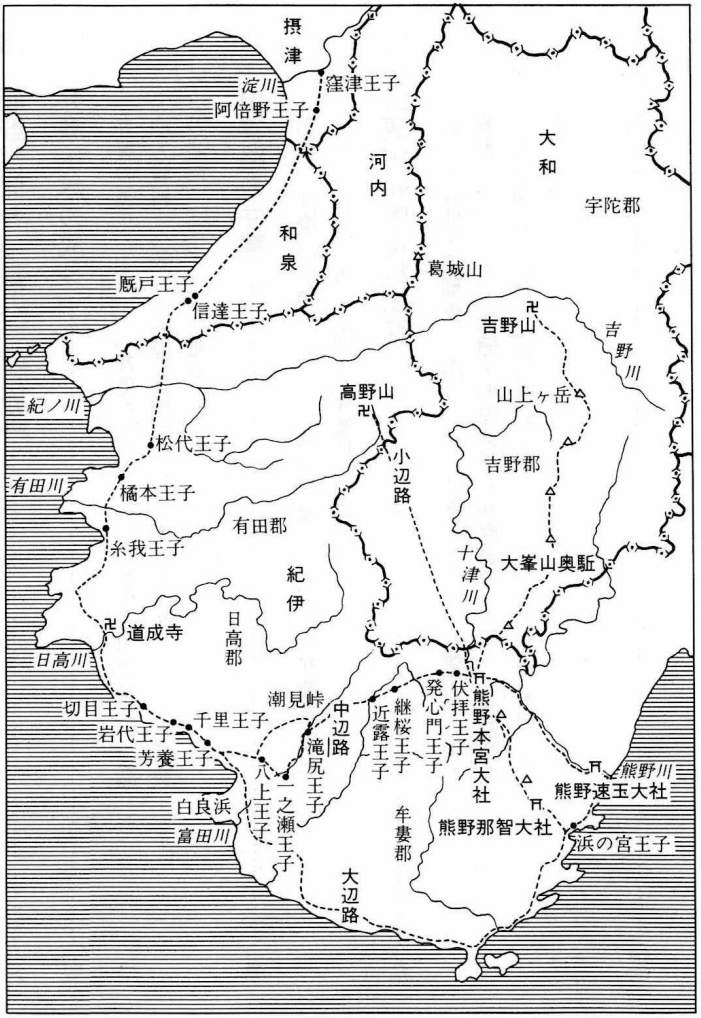
中瀬喜陽(なかせ・ひさはる)
1933年和歌山県に生まれる．東洋大学中国哲学文学科卒業．現在和歌山県立南紀高校教諭，田辺市文化財審議委員．編著書に『父 南方熊楠を語る』(共編，日本エディタースクール出版部)，『南方熊楠書簡—盟友 毛利清雅へ』『南方熊楠 門弟への手紙—上松蓊へ』(ともに編・解説，日本エディタースクール出版部)，『南方熊楠アルバム』(共編，八坂書房)，句集『若王子』(本阿弥書店)，『熊野中辺路—詩歌—』(編著，熊野中辺路刊行会)など．

説話世界の熊野—弁慶の土壌—

1991年8月26日　第1刷発行

著　者　中　瀬　喜　陽
発行者　定　村　質　士
発行所　日本エディタースクール出版部
東京都千代田区三崎町2-4-6
電　話　東京(03)3263-5892
FAX　(03)3263-5893

© 中瀬喜陽 1991
三秀舎印刷・牧製本
ISBN 4-88888-177-4



熊野参詣道略図(王子は本文に頻出するもの以外は省略した)

説話世界の熊野 弁慶の土壌

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　熊野の説話文学……一
はじめに　一　酒泉郷　六　菩薩となった道祖神　一〇　熊野の御本地　一四　信仰の功徳　一九　『源平盛衰記』の熊野　二四
『太平記』の道行き　二八　牟婁の長者　三三　小栗判官　四〇
無住禅師の『沙石集』四四　『一遍聖絵』の熊野　四九　狩人の斎いた神　五三　『梁塵秘抄』五七　俗謡の世界　六三　『古事談』・熊野の験者たち　六六　八咫烏伝承　七一　信仰の川　七五
初期皇室の熊野詣　七九　熊野信仰の原形　八四

二　『平家物語』の熊野……八九
清盛の熊野詣　八九　鬼界が島の流人　九四　重盛・維盛の熊野詣　九八　文覚荒行　一〇三　鶏合せ　一〇六　湯浅党　一一〇

三　道成寺縁起と清姫絵巻……一二五
牟婁の悪女　一二五　清姫の先行説話　一二九　『賢学物語』一三三
「道成寺縁起絵巻」一三四　真砂の庄司　一三七　道成寺の釣鐘
一三九　清姫縁起　一三一　清姫のねじ木　一三五　「蛇性の婬」
一三六

四　熊野信仰と「鉄人」の伝説……一三八
五　弁慶伝承の成長……一四三
弁慶の誕生　一四三　『弁慶物語』一四八　弁慶の出生説話　一五四
地方資料　一五五　弁慶と鍛冶　一五八　安宅の関　一六三　弁慶
の遺物　一六八　江戸随筆と弁慶　一七二
六　出雲路の弁慶……一七七
出雲の弁慶出生譚　一七七　「弁慶生縁」一七八　「弁慶之由来」
一八〇　長見の里　一八四　弁慶島　一八八
七　武蔵坊弁慶資料総覧……一九三
説話・謡曲・浄瑠璃　一九三　江戸随筆　二一一　弁慶関係の主な
著書　二一二　南方熊楠・柳田国男の弁慶論考　二一三　弁慶関係
の主な論文　二一四　地方資料　二一六　その他の主な資料　二二八
小説　二三〇
あとがき……二三三

一　熊野の説話文学

はじめに

〝熊野〟は、〝隠野（こもりの）〟――死者の霊魂の籠る所――からつけられた地名だといわれる。三千六百峰と唱えられる熊野の嶺々は、死者の宿るところであり、死霊から祖霊へ、祖霊は神霊へと昇華する。熊野の神は祖霊の昇華した神である。

中世に成立した「熊野の御本地のさうし」には、そうした死者信仰を説明するかのように、熊野の神の由縁が語られている。それによると、もともと熊野三山の神は、インドの摩訶陀（まかだ）国の国王と、その后、それに王子と王子を導いた聖（ひじり）で、本尊は后の頭骸骨をまつり、証誠殿（しょうじょうでん）の阿弥陀如来は父の大王をまつり、那智権現は聖の化身である薬師如来、若王子（にやくおうじ）の十一面観音は、王子をまつったものだと説かれている。御伽草子の、この「熊野の御本地のさうし」については、いずれ稿を改めて詳しく説明せねばならぬ重要な内容を胎んだものであるが、神霊として、死霊が昇華する筋だけを読みとっていただきたい。

伏拝王子より本宮旧社地を望む

死霊の宿る信仰の山には、また、かずかずの奇瑞、霊験がまつわり語られる。奥州の藤原秀衡が、熊野の神に祈って子供が授かり、そのお礼参りに、はるばると熊野へ参り、滝尻の社(中辺路町)まで辿りついたところ、俄かに奥方が産気づいた。しかし、この赤ん坊を抱いて熊野まで行くことはできぬ。そこでやむなく滝尻王子の後ろの山へ子供を預けて行くことにした。道中子供の身の上を案じた秀衡は、野中(のなか)の里(中辺路町)で道ばたにあった桜の枝を折って、この桜が根づいていれば赤ん坊も丈夫に育っていることだ、と祈念して、側にあった檜の切り株に突きさして参詣した。帰りに野中の里を過ぎると、桜は今を盛りと咲きみちている。ああ、それでは産所の幼児も無事だと喜び、夫婦して元の所に帰ると山のけもの(狼狐)が守り育てて

くれていた、という話がある。熊野の神は子授けの神であり、また、捨てられた幼児を加護する神なのである。熊野地方にのこる〝捨て子〟の風習がそれを裏付ける。

一九七八年の夏、熊野の民俗について生徒に課題を出したところ、次のような報告があった。

「いつから始まったのか、古い型はどうなのか、はっきりしませんが、現在行なわれている「捨て子」のやり方を書いておきます。

男親の厄年に男の児が、女親の厄年に女の児が生まれた場合、また女の子が二人いて、三人目に、男の子が生まれた場合、その児はいったん捨てられます。そうしないと、生まれた子供が弱く育ったり、家族に不幸事が起こるとされているからです。捨てるのは、まず四つ辻にゴザを敷き、その上に南向きに赤ん坊を寝かす。健康に育った人、もしくは育てた人に、あらかじめ拾い親となってもらうことを頼んでおき、当日、拾い親は、チリ取り、または板箕(いたみ)へ、箒で二回子供を掃くかっこうをしたあと、自分の家へ連れて帰る。拾われた子供は、その家の家族になったとして、赤飯を炊いて祝ってもらう。捨てた親は二時間から一日ぐらい(人によってまちまち)経ってから、御神酒を持って迎えにいきます。拾い親の家の着物と着替えた子供は、家人の手に抱かれて家に帰ります。今ではこれを行なわない家もあるということです。」(庄司睦・南紀高校専攻科一年)

親の厄年に生まれた児あるいは虚弱に生まれた児は忌まれ、一旦捨てられた後、たくましく成

長する。これは熊野地方に限らず各地にあった。各地にあった証拠に、捨て子をテーマにした説話が各地にある。『酒呑童子異聞』(佐竹昭広著、平凡社)によると、〝しゅてんどうじ〟は〝捨て童子〟だという。御伽草子『伊吹童子』では、母の胎内で三十三カ月、髪の毛が黒々と肩まで垂れ、歯が上下とも生えそろった童子が、生まれ落ちるや目をぱっちり開けて「父上はいづくにいますぞ」と尋ねたので人びとはびっくり。鬼子だということで伊吹山中の谷底に捨てられるが、虎狼野干(やかん)が守護し育てる……。

修験道の開祖役行者(えんのぎょうじゃ)もまた、生まれ落ちた時に一枚の花びらを握って出て、人語を話した。母は驚いて、山林に捨てた。ところが数十日を経ても飢えた様子が見えない。狼や狐がその子にかしずき育てているのである。たまたま通りかかった大和の商人が、その子を拾って帰り、養った、といわれる。『曾我物語』の平井保昌も、そして武蔵坊弁慶も、まったくよく似た出生のいきさつから山中に捨てられ都の人に拾われるのである。

こうみると、中世の御伽草子では、一つのパターン――捨て童子型説話――が完成しているようであるが、各地の民俗信仰から発生した話からかなりの時間が経過している筈である。弁慶の異常な出生は熊野の説話の典型化されたものなのである。

典型化といえば、力持ちの弁慶の話もまた熊野は多い怪力譚を下地にしているとみられる。田辺市稲成町には獺田川(おそたがわ)という怪力無双の力士がいて、阿波国(徳島県)から手合せにきた力士を砂

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

浜に投げると埋ったという話や、中辺路町兵生の奥山に住む松若は、小さい時家出したまま山に住みつき、数百年後里に出てきて塩を乞うたが、そのさまは鬼のようだったと伝える。十津川方面では今もこの松若の怪力を伝えて、立木を根ごと引きぬくさまを〝松若掘り〟というと誌す。そのほかにも、同じ中辺路の悪四郎、『源平盛衰記』に登場する金剛力士など、熊野育ちの怪力譚は多く、七つ道具を背負って、獅子奮迅の働きをし、あるときは釣鐘を分捕って意気揚々と引きあげる弁慶強力譚と同じ温床を持つものであろう。

説話および説話文学とは、こうした〝語りもの〟が、文字化して定着したものをさすのである。だから学者の中には「クチガタリの文学と文字の文学との出合いの文学」という表現をして、説話文学を想定している人もいる。有名なものでは『今昔物語』『宇治拾遺物語』、あるいは『竹取物語』があるが、熊野に関するものでは、仏教説話として『日本霊異記』『法華験記』『今昔物語』などがあり、また『平家物語』『源平盛衰記』『太平記』と軍記文学の舞台に登場した熊野は、『義経記』に至って熊野生まれの弁慶で一段と光彩を放ち、あい前後して語られる道成寺の釣鐘伝承もまた、熊野育ちの情炎の女清姫と、熊野参詣の若き僧安珍の物語として、堂庵で絵解きをされるまでに成長を遂げる。

ここでは、こうした熊野に関する説話文学を解題して、弁慶の土壌を探ってみたいと思っている。

酒泉郷

寛政七年(一七九五)に書かれた岡田新川の『秉穂録』には「熊野山中にて、炭を焼く者の所え、七尺ばかりなる大山伏の来る事あり。魚鳥の肉を火に投ずれば、なまぐさきを嫌ふて去る。又白き姿の女、猪のむれを追かけて来る事ありといふ」とか、「熊野の山中に、長八尺ばかりなる女の屍あり。髪は長くして距にいたる。口は耳のあたりまでさけ、目も普通よりは大きなりしとぞ」というような熊野の怪異な話が誌されている。もはや十九世紀を迎えようとする時期においてさえ、人びとは熊野を異郷視し、不思議の国と見ていた。だから山野を彷徨する大山伏や大女がいても、それはあり得べき話として、誰も異議を唱えなかった。中世においては、なおさらそうした異郷意識が濃厚で、熊野山中には人知れぬ里があって、そこには芳醇な酒がこんこんと湧き出る泉がある、と信じられていた。『今昔物語』巻三十一の「大峰ヲ通リシ僧、酒泉郷ニ行ケルコト」がそれである。かいつまんでその内容を紹介すると、

一人の修験者が、大峰を通っているうちに道に迷った。しかたなしにどんどん行っているうちに人里が見えてきたので、ここがどこか尋ねたら帰る所もわかるだろうと思って人家に近づくと、きれいに石積みをして屋根までしつらえた泉水がある。その水を飲もうとして近寄ってみると、

それは水ではなく酒が湧き出しているのであった。驚いているところへ里人がやってきて、どこから来たのかと聞く。それで、大峰修験の僧であるが道に迷ってここへ来た、と答えると、一緒に来い、という。あるいは殺されるのではないかと不安であったが、逃げることもできないのでついて行くと、村長（むらおさ）らしい男が尋問したのち、連れて行けと命じた。今度こそ殺されると思ったがついて行くと、その男は「この里に迷いこんできた人をそのまま帰すと、この里のことが知れわたってしまう。それでみんな殺すのだ」と話す。僧は必死になって哀願した。わたしは諸人のために大峰に修験して身をさいなんでいるのだ。それが、思いがけず道に迷ってここに来て殺される。殺されるのは恐しくないが、罪もない僧を殺すという罪は大きい。だから、そんな大それた罪を犯さないためにわたしを助けよ、と。

その男は、僧のいう道理に負けて、一切この里のことを口外するな、と念を押す。僧はもちろん命を助けていただいたからには、決して誰にも話さない、と約束して、教えられた道を通って元の道に出、家に帰り着いた。

ところが、さて家に着くと、あんなに誓ったことなどきれいに忘れて、いつの間にか、あの酒の湧き出る里のことを、誰彼となく話して廻る。聞いた者は、嘘だろうと信用しない。それで僧は、ますます詳しくその里のことを話す。すると血気さかんな若者たちは、こんな話を聞いて見に行かないという話はあるまい。それに先方は、鬼でも神でもない普通の人間だというじゃない

か、さあ行こうと屈強な若者五、六人が手に手に弓矢や刀を帯びて、例の僧を道案内に立てて出発しようとする。村の長老たちは、向こうではきっと用心をして待機しているに違いないからよせ、というが聞き入れない。とうとう押し切って出発してしまった。

親御たちは、安否を気づかって歎きくらすが、若者たちはとうとう誰一人帰って来ないところをみると、皆殺しに遭ったらしい。それにしても、あの僧さえつまらんことを言い触らさなければ、こんなことにはならなかったのに、と思うと口惜しい。これからみても人の口の軽いのは慎まねばならないし、また軽口に乗せられることも用心しなければならない。

その後、酒泉郷の話は絶えて聞かない。

これはトマス・モーアの『ユートピア』や陶淵明の『桃花源記』に比肩するような理想社会、空想社会がこの重畳たる吉野・熊野のやまなみのひだ深く存在するという構想の説話である。こういう山中異郷譚ともいうべき話はまだある。

やはり修験僧の義睿（ぎえい）というのが熊野に参ってのち、大峰、金峰山と巡っているうちに道に迷ってしまった。法螺貝を吹いて助けを求めるが応答はない。仏に祈って歩いているうちに山中に一軒の僧房を見つけた。中に一人の僧がいる。その僧がお経を読むと、経巻はひとりでに空中にと

びあがって巻き返し紐を結ぶ。次の経を読むとまたしても空中に浮かんで巻き返す。そこで義睿がすっかり感心して立っていると、僧の方でも義睿をみつけて、「此処へは今まで誰も来た人がない。それなのに、あなたはやってきた、何故か」と聞く。そこで道に迷ったことを話すと、部屋に呼び入れて食事も与えてくれたが、そのおいしいことといったら、たとえようもない。

義睿はこの僧に尋ねた。「お上人さんはどうしてこんな奥山に住んでおられるのですか」。すると、僧は答えた。「わたしはここに住んでもう八十年になる。元は比叡山の僧であったが、ふとしたことで勘当され、諸国を放浪の末、この山に辿りついて死ぬ時期を待っているのだ」と。そのうち僧は義睿に向って、早くこの地を去れ、という。義睿は、「わたしは道に迷って歩き疲れもうどこへも行けません。どうぞ此処に置いて下さい」と頼む。僧は「わたしはあなたが嫌いだからそういうのではない。もう人間の心を離れてから久しいので、強いてそういうのだが、もしあなたが今夜ここに留まるというのであれば、どんなことがあっても決して声をたてないで、静かにしていて下さい」といって、許してくれた。その晩義睿は、不思議な集会を見た。馬や牛、鳥や鹿の頭をした者どもが大勢集まって来て花を供えたり、菓子や食べ物を捧げて庭の棚を飾り、めいめい礼拝をする。そのうち、一人が「今夜は人間のにおいがする。誰か来ているのか」と話すのをきいて、義睿はどきどきするが、じっとこらえた。その間も僧は一心に法華経を誦している。

やっと長い夜が明け異類も帰っていった。

義睿はあの畜生どもはどこから来たのかと尋ねるが僧は教えない。帰るというと、僧は義睿に「南に向って行け」といって水瓶をとり出せば、水瓶は踊りながら道案内をする。山頂まで辿りついて下を見ると、里が目についた――水瓶は空中に隠れ、義睿はやっと里に辿りつくことができた。その後義睿は、山中で逢った仙人のことを涙ながらに話し、聞く人もまたその仙人をあがめた。だが、いまだに誰もその所に行った人はいない。

熊野は異郷であり、神秘の国であるというイメージは、こうして形成されていくのである。

菩薩となった道祖神

前話に引きつづいて、これも『今昔物語』に出る〝法華経〟の霊験説話である。

天王寺(四天王寺)に住む道公という僧が熊野詣をしての帰り、南部(日高郡)まで来たところ日暮れになった。そこで道ばたの大きな木の根方に夜露を避けて寝ることにした。ところが夜中になると二、三十人の騎馬の者がこの木の傍へやってきた。何事だろうと思っているうちに、中の一人が、「木の本の翁はいるか」と声をかけた。すると「ああ、ここにいるよ」という返事が木

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com